山の本　2017年１月



『それでもわたしは山に登る』　田部井淳子著　文藝春秋　2013年　786.1/タ/

抗がん剤の副作用で足がしびれ、自宅の階段を上ることさえままならない。だが、点滴の合間を縫って、登山家は山へ向かった-。山から学んだこと、乳がんのこと…。自らに降りかかった危機をどう乗り越えていったかを綴る。

『人生、山あり時々谷あり』　田部井淳子著　潮出版　2015年　786.1/タ/

「世界初」の称号と3度の遭難、突然のがん告知と余命宣告、そして東日本大震災の被災地の高校生たちとの富士登山…。女性世界初のエベレスト登頂を果たした著者がつづる感動エッセイ。『潮』連載を加筆修正。

『だからこそ、自分にフェアでなければならない。』

小林紀晴著　幻冬舎　2014年　786.1/コ/

彼だけが何故、日本人で唯一、8千メートル峰14座を登り切れたのか。写真家・小林紀晴がプロ登山家・竹内洋岳にインタビューし、彼のルールに迫る。著者が同行した天狗岳登山の様子も記す。

『単独行者(アラインゲンガー)』　谷甲州著　山と渓谷社　2010年　913.6/タ/

案内人(ガイド)を連れた登山があたりまえだった時代、彼はなぜ、単独行を選んだのか? 昭和初期に活躍した伝説の登山家・加藤文太郎の生涯を描く。『山と溪谷』連載に書き下ろしを加えて単行本化。

『ミニヤコンカ奇跡の生還』

松田宏也著　山と渓谷社（ヤマケイ文庫）　2010年　B786.1/マ/

山頂を目前に悲劇の幕は切って落とされた。飢え、凍傷、そして仲間の死。ズタズタに傷ついた肉体を引きずりながら孤独の下山を開始する…。風雪のミニヤコンカからの酷烈な生還の記録。83年刊の再刊。

『ツンドラ・サバイバル』　服部文祥著　みすず書房　2015年　786.1/ハ/

夏の南アルプスでの墜落事故。その現場への再訪と再起。秋の北海道、冬の四国。ロシア極東北極圏縦断の旅…。広大なフィールドで展開するサバイバル・ノンフィクション。『岳人』連載「超・登山論」をもとに大幅加筆。

『新編・風雪のビヴァーク』　松濤明著　山と渓谷社　2010年　786.1/マ/

1949年1月、風雪の槍ガ岳・北鎌尾根に消えた松濤明。見逃されていた記録を掘り起こし、遺書も完全に復刻。詳細な解説を加えた決定版。60年朋文堂刊「風雪のビバーク」を底本に『山小屋』等から四編を追加収録した再刊。

『ザイルを結ぶとき』　奥山章著　山と渓谷社　2000年　786.1/オ/

アルピニズムの発展を願い、夢を追い続けた奥山章の生涯を、死に至るまでに残した記録・紀行・評論・書簡等から追う。戦中派登山家として名を残した著者の情熱的な人生がよみがえる。73年刊の再刊。

『蒼氷・神々の岩壁 』　新田次郎著　新潮社（新潮文庫）1991年　B913.6/ニ/

富士山頂の苛烈な自然を背景に、若い気象観測所員の厳しい生活と、友情と愛と死を描く「蒼氷」、天才クライマーが登攀不能といわれた谷川岳衝立岩を征服するまでを描く実録小説「神々の岩壁」ほか全4編を収録。

『穂高に死す』　安川茂雄著　山と渓谷社（ヤマケイ文庫）　2015年　B786.1/ヤ/

近代アルピニズムの黎明期、その揺籃の地となった槍・穂高連峰では数々の初登攀の記録が打ち立てられたが、その陰で凄惨な遭難事故も起きていた。槍・穂高の登山史を振り返り、若くして山に逝った登山家たちの青春群像を描く。